

妙の湯

女性による女性のための温泉

佐藤貢一郎さんの東京での職を辞するという決断を、旅館の総支配人である母・京子さんは支持しました。京子さんは当初から、自分が実現したいことについて明確なビジョンを持っていました。「この辺りの温泉宿の多くは、ごく簡素なものでした。また、自炊スタイルの宿が多かった頃は、女性たちは一日中家族の世話で忙しく、リラックスする暇がありませんでした。母は、都会から来た女性たちがくつろげる旅館を作りたいと考えていました」と貢一郎さんは言います。「母は自分が好きな京都や京料理をお手本とした、日本らしい洗練された場所を作りたいかったのです」

京子さんのタイミングは絶妙でした。1980年代後半、日本では女性の就労が進み、男女雇用機会均等法が成立したばかりで、ツアーの団体客や会社の慰安旅行客で溢れかえっていない温泉を積極的に求めている人がかなりたくさんいました。

「家族では、休暇の行き先を決めるのは女性であることが多いので、京子が女性客に焦点を当てたのは、賢明で時流に合った発想でした」と貢一郎さんは言います。妙の湯に一步足を踏み入れると、廊下に漂うお香の香りや、ティファニー風のアール・ヌーヴォーのステンドグラス・ランプの穏やかな間接照明など、女性らしい上品さに包まれます。

妙の湯は時代に調和した絶え間ない改善を信条としており、顧客の声を反映した小さな変化が随所に見られます：伝統的な布団ではなくベッドを備えた客室、プライバシーを重視する人のための家族風呂、おひとりさまのためにダイニングルームの窓際に設けられたカウンターなど。しかし、ひとつだけ創業当時から変わらないのが内湯です。サダジさんが何十年もかけてこの宿を築き、経営してきたことへの敬意から、このお風呂はサダジさんの時代とまったく変わらぬまま残されています。

妙の湯は、乳頭温泉郷の伝統に倣い、混浴露天風呂を備えています。「恥ずかしがり屋の方もいらっしゃると思いますが、一緒にお風呂に入りたいというカップルもいらっしゃいます。そういう意味では、混浴はマーケティング的にもプラスです」と貢一郎さんは言います。妙の湯では「ワニ」（よこしまな気持ちで温泉にくる人）とのトラブルを避けるため、混浴風呂ではタオルを身体に巻くよう女性客に勧めています；また、女性専用の露天風呂も別に用意されています。

女性に人気の高い旅館でありながら、妙の湯の「妙」という漢字は皮肉にも「少ない」と「女」という意味の部分から成っています。実は、この漢字は仏教の経典である法華経の冒頭の一節に由来します。「曾祖父はとても信仰心の厚い人でした」と貢一郎さんは説明します。「彼は滝の下で瞑想しながらお経を唱えるのが好きでした！曾祖父がまだここに住んでいたころは、朝早くからお経を唱え、鐘を鳴らしていました。お客さんはびっくりしていました！」